

所属	言語文化研究科 日本語・日本語教育専攻 修士課程	修了年度	平成 29 年度
氏名	丁 悠晴	指導教員 (主査)	池田 広子

論文題目	日本語学習における中国人日本語学習者の逆行転移に関する研究 —漢字を中心に—
------	---

本文概要

1.研究背景

Cook(2003)によると、転移は一般的に L1 から L2 への影響と考えられているが、習熟度が高い L2 学習者やバイリンガルでは L2 が L1 に影響を与えることも考えられ、逆行転移と呼ばれる。中国人日本語学習者の転移に関する研究は、L1 から L2 への転移に偏っており、逆行転移に関する研究は未だ不十分である。

2.研究目的

本研究では、東京近郊某大学院の院生の通訳授業で院生が書いた漢字に注目し、日本語と中国語のデータを収集し、漢字を中心に、日本語習得における中国人学習者の逆行転移について以下の3点を明らかにした。

- ①第二言語（日本語）の既習知識は第一言語（中国語）に影響を与えるか。
- ② 逆行転移が起こった原因はなにか。
- ③学習者の逆行転移パターンはどのようなものなのか。

3.研究方法

①データの収集方法

研究協力者5人分のデータ（2016年度秋学期の通訳授業のプリント）を収集した。

②分析方法

- A. プリントのメモの中に a. 日本語で書くべき漢字を中国語の漢字で書いた場合、b. 中国語で書くべき漢字を日本語の漢字で書いた場合、c. 誤字が出た場合の漢字を取り出した。それぞれの漢字がメモの中に出現した語彙をすべて取り上げた。
- B. 収集した漢字データを分類する。「中国語で書くべきところに日本語で書いた場合」と「日本語で書くべきところに中国語で書いた場合」の二つに分け、それぞれの下にまた「○（正しく書いた）」と「×（間違った）」の二種類に分けた。
- C. 誤字を書いた理由についてフォローアップインタビューで調査協力者に聞いた。
- D. 理由を「中国語を日本語に持ち込んだ場合」、「日本語を中国語に持ち込んだ場合」と「混乱している場合」の3つに分類し、表にまとめ、パターンを整理した。

4.結果と考察

3. ②の枠組みと手続きによって分析結果、逆行転移が確認された。確認された理由は5つの点から示した。

- ① 日中両国の共通している漢字は多く、学習者が油断する可能性がある。
- ② 通訳の授業で、話すことが圧倒的に多いので、書く時間が限られている。
- ③ 日本語を学習しているとき、または使用しているとき、指摘されたことがあるかどうかに関係している。

- ④ 日常生活で日本語の漢字が見慣れたため、中国語より日本語の漢字のほうが先に思い出す。
- ⑤ 日本語が強い方になっているにつれ、母語の漢字知識が不安定な状態になっていると思われる。
- さらに、学習者の逆行転移のパターン、つまり逆行転移が起こりやすいパターンを以下7つにまとめた。①複数の漢字と対応している漢字、②字形が似ている漢字、③使う頻度が高い日本語の漢字、④異字認識はあるが、思い出すのが遅い漢字、⑤母語の磨滅が発生している漢字、⑥指摘されたかどうかに関係する漢字、⑦自律的に書く漢字である。

5. 今後の課題

今回の調査では横断的な調査を行ったが、縦断的な視点でみると、さらに新たな発見が出てくるのではないかと推測される。今後の課題としたい。

【参考文献】

劉曉兩 (2010) 『基干中日常用汉字对比的对日汉字教学研究』 中国社会科学出版,
P. 42-91

Cook Vivian(2003) *Effects of the Second Language on the First*. Clevedon: Multilingual Matters Publishing.